

図画工作・美術科における「製作後」の作品に関わる研究

芸術系教育サブプログラム

納谷 梨花子

【指導教員】 小澤 基弘

【キーワード】 図画工作 美術教育 展示 鑑賞 こだわり

1. はじめに

平成 29 年に告示された、新学習指導要領が掲げる図画工作科の目標に「造形的な見方・考え方」という視点が追加され、目標及び内容を改善・充実することが図られた。学習指導要領(平成 29 年度告示)では、「造形的な見方・考え方」を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくり出すこと」であるととした。この視点を中心に据え、育成を目指す資質・能力を以下の三つの柱で整理している。

(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることが出来るようにする。(知識及び技能)

(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることが出来るようにする。(思考力、判断力、表現力等)
--

(3) つくり出す喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。(学びに向かう力、人間性等)
--

小学校教員は以上の目標と、学習指導要領の内容をもとに具体的な指導を考えていくこととなる。

また、平成 29 年告示の学習指導要領の改訂に関わる課題の一つとして「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められるところである。」と記されている。学習指導要領(平成 29 年告示)の改訂の経緯に以上のような課題を一例として挙げたが、その指導内容については未だ手探りである。

ここで、私が疑問に感じたのは、内容の充実が図られるべ

きであるのは、授業内での製作・鑑賞活動だけだろうかということだ。この考えの元になったのは、大学生時代の卒業制作である。「日常の中で身近に美術を感じられること」として、家に「絵を飾ること」に即した制作をした。では、小学生にとって身近に美術を感じられるのは何であろうか。私は、図画工作ではないかと考える。そして、授業内での活動は勿論、「製作後」にも焦点を当てることで、継続的なアプローチができ、児童生徒の造形的な見方・考え方が広がるのではないだろうか。今回は「製作後」の内容を中心に検討していきたい。

2. 図画工作科の教科観・指導観

研究の本題に入る前に、図画工作科の教科観・指導観についてさらっていききたい。かつての図画工作は、作品を浮くることが、はじめから目標であるような「作品主義」とそれを支える「技術主義」で成り立っていた。しかし、そのような「作品主義」的な指導が、子どもの図工・美術嫌いや苦手意識を招いていることが指摘され、図画工作・美術は「作品」を中心とする教科観から製作行為の過程を重視する教科観への転換に努めてきた。言い換えると、「美術の教育」から「美術による教育」という視点が重視されているのである。この教科観の転換は、平成 29 年告示の学習指導要領以前から試みられており、「造形遊び」もその一例として捉えることが出来る。「造形遊び」は「結果的に作品になることもあるが、初めから具体的な作品をつくることを目的としない」「思いつくままに試みる自由さなどの遊びの特性を生かしたもの」と記されており、今日でも多くの研究や実践が行われている。その成果もあり、現在では、図画工作科の過程重視や「美術による教育」といった教科観は広く浸透している。しかし、教科観は転換されても、実践ではどのようにしたらいいかわからないという声は未だ多く挙がっているようだ。これに関しては、目的から逸れるため、本研究では追求しないこととする。

3. 本研究の背景—問題の所在と目的—

本研究のきっかけとなったのは、自身の卒業制作である。また、実地研究 I での授業実践やプロセス重視の教科観も

本研究の課題設定をした要因の一つだ。ここでは、大きく二つの問題を上げて展開していく。まず一つ目は、「つくりっぱなし」という現状だ。私は、図画工作科の現状として「つくりっぱなし」という状況があるのではないかと考えている。一単元終わると、その単元で製作した作品は家に持ち帰るか、学校で保管をする。児童によっては、捨てる場合もあるだろう。製作後は、その作品に再び触れる機会はほとんど無い。校内の展覧会や図画展といった、製作した作品を飾るといった催しはあるが、それを目的として製作するのならば、製作する意味が見失われてしまうだろう。二つ目は、「製作過程の重視」である。先ほど図画工作科の教科観の転換について、現在の図画工作科が「過程重視」の教科観であるということを述べた。私自身、製作過程に焦点を置いた指導や授業設計をすることは、問題ないと考えており、大切だとも考えている。私が主張したいこととしては、過程重視を「しすぎている」のではないかということだ。果たして、大切にすべきことは過程だけなのだろうか。

本研究は、以上の二点を基にして、図画工作科を中心とした製作後の作品への関りに焦点を当てた研究を進め、製作後のアプローチをの方法やその効果について考察・検討することを目的とする。

4. ポートフォリオの可能性

学習指導要領改訂により、図画工作の授業時数は削減され、少ない時数と対照的に、図画工作に求められる教育内容は増えた。その上、過程が大切にされていることから、未完成のまま曖昧なまとめで単元が終わる、という現状も目にされる。さて、製作した作品(製作が終わらなかった作品)は、単元が終わったらどうなるか。校内の作品展での展示や、図画コンクールへの出品を除き、ほとんどの場合は、家に持ち帰るだろう。

ここで、制作後のアプローチの一つとして「ポートフォリオ」を挙げる。高浦勝義は、教育界におけるポートフォリオの定義について「ポートフォリオとは、入れ物の中に、一人ひとりの子どもの学習到達の成果及びそこに到達するまでの過程が分かるような資料・情報を目的的・計画的に集積したもの」と述べている。また、塩川と芳賀(2021)は、「美術教育におけるポートフォリオでは、児童生徒の振り返りの促進や学習状況の把握、主体的に学習に取り組む態度の促進、学習評価への活用ができると考えられている。また、学習評価において、完成作品によって成績を出すためだけのものではなく、指導と評価は一体となって児童生徒一人ひとりの学びを支援していくために活用されている。」と述べ、美術教育に関わるポートフォリオの有用性を明らかに

している。製作の過程を記録し、その記録さえ管理を怠らなければ、後からいつでも単元の内容や単元の成果物(存在する場合に限る)を振り返ることが出来る。方法や環境を整えることで「ポートフォリオを用いた制作後の振り返り」を効果的に行えるのではないだろうか。塩川と芳賀はさらに、「ICTを活用したeポートフォリオ」の可能性につちえ研究をしている。その利点については次のように述べている。(森本 2012)

①	内容の再配列や編集、結合が容易である。
②	画像、音声、動画などのマルチメディア・データを扱うことが出来る。
③	多量なデータを様々な記録媒体へ保存可能で、複製も容易に行える。
④	いつでもどこでもeポートフォリオにアクセスすることができる。
⑤	機関内だけでなく地理的に離れた人々とのeポートフォリオを活用した相互作用が期待できる。

ICTの台頭により、紙ベースだったポートフォリオの可能性が広がったと言える。紙ベースの欠点であった、保管場所の幅をとることやかさばるといった問題が難なく解消されるとも言えるだろう。塩川と芳賀はeポートフォリオの実践研究を行なっている。ロイロノートというアプリを用いて、「ふりかえりアルバム」を作成し、そこから得られた気づきや課題について述べた。eポートフォリオの効果のまとめとしては、【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の三観点に分けて整理している。

【知識・技能】では、「活動中に周知した知識や技法を活用しやすい。」と、【思考・判断・表現】では、「気づきや考えを広げやすい」や「作品について自分の言葉で表しやすくなり、絵や物で表現だけでなく文字で表現する力も伸びる」と、【主体的に学習に取り組む態度】では、「つくり放しになりにくい」や「見通し持ちながらしやすい」などが挙げられている。一方で、ネットワークの不調や製作活動が主導となる授業で、振り返りの時間をどれほどとるかという課題があったようだ。

他、テクノクラフが提供しているWEBアプリ「レポクラフト」を利用して振り返りをしている学校がみられた。「レポクラフト」とは、図工・美術の学びをサポートするデジタル教材で、教科書監修の先生の協力の下、図工・美術題材が全て収録されたWEBアプリだ。題材をWEB上で見ることが出来るだけでなく、製作記録や他の人の作品を鑑賞することが出来る。児童が入力したデータは、先生へ集約され、過程を重視した評価もできる授業記録共有型アプリケーション

ョンだと紹介されている。実際にレポクラフトを導入していた小学校では、図工の授業ごとの振り返りをこのレポクラフトを利用して行っていた。教員が用意したレポクラフト上の振り返りを授業終了前に入力する。これは、ものの数分で取り組むことが出来るうえに、タブレット端末さえ手元があれば、どこでも取り組むことが出来る。そして、インターネットを問題なく利用できる環境であれば、管理に場所を取らず児童も教員もアクセスが容易になる。このレポクラフトについては、リリース日が2023年3月31日と新しいシステムであるため、実践例や実践から得られる結果等については私は把握することが出来ていない。しかし、今後図画工作科で製作の過程を記録したり、製作活動を振り返る際に手軽に利用できるツールとして、その効果に期待が持てるものであると考える。

また、自身の制作活動の経験から、制作後の振り返りの大切さを感じている。私は高校生の頃美術部に所属しており、平日は毎日制作活動を行っていた。しかし、絵を描いているとき、描いているその時は上手く描けない、何を直せば良くなるのか、何が足りないのかわからないといった場面に遭うことが数多く、完成しても作品の出来にはモヤモヤが残っていた。幸いなことに、私は大学へ進学した後も制作活動をする機会があり、自分の表現の試行錯誤を度々行っていた。専修有志の作品展に参加したり、実技の講義で決められたテーマをもとに制作をしたりした。そして、その時に制作した作品を年度末や、一年、二年と期間が経ってから再び観てみると、「この描き込みをもっとやれば、よくなりそう」とか「全体のバランスが悪いように見える」など、描いている時には見つけられなかった修正点や、アイデアが思い浮かんできたことをよく覚えている。この自身の経験から、「期間を空けて振り返りをする」ことが、児童の見方・考え方を広げる手立てとなるのではないかと考え、ポートフォリオがそれを容易に実現することができる方法ではないかと考えたのだ。これの是非については、実践研究が少ないため、あくまで方法の一つとしてここでは扱うが、今後の研究を進める材料として興味深いものとなった。

5. 製作過程の重視と作品

次に、製作過程の過度な重視について触れていこうと思う。作品主義から、製作の過程を重視する動向へと変化し、評価の観点や授業の目標なども共に変化している。学習指導要領(平成29年度告示)では、「主体的・対話的で深い学び」と示されており、この視点を基に授業を改善していくことが学習過程を捉えるうえで大切だと言われている。製作過程の重視について、V. ローウェンフェルドは「子供にとつ

て効果のあるのは、創作過程であって、完成品ではないということが、決定的に重要だ」と述べている。また、とある実例から「美術教育においては、美術は目的に対する手段としてのみ用いられるもので、それ自体が目的ではないと、はっきりということができよう。創造性がどこで発揮されようとも、人々がいつそう創造的になるように創作過程を利用することが美術教育の目的である。」とも述べ、繰り返し「完成品」よりも「創作過程」の重要性を主張している。彼が「創作過程」を重視しているのは、創作過程が子どもの心身の成長・自己同一化に大きく関係しているからだ。

私が問題として挙げたのは「過程重視のしすぎ」だ。これは、実際に図画工作の授業を観察した際に感じたことだ。単元の終わりがはっきりしておらず、完成した児童から作品カードを記入して終了という流れが繰り返されていた。教員側は児童の製作過程やその過程で起こった事を見取れるが、児童側から見ると過程を振り返るという時間が無いため、製作の過程で得られた気づきをその時間で完結させてしまっているのではないかと考えた。つまり、教師側の一方的な認識や把握で終わっているということだ。子ども自身が、過程で得たものを自分のものにするには、教師の支援やそのための環境を整えることが必要である。

本件に関する研究の進め方としては、図画工作科の学習過程に着目した先行研究から得た知見をもとに、考察を行うことと小学校図画工作科の授業を観察する二点を予定している。後者については、観察する際にどんな視点を持つかが大切になってくる。例えば、単元に入る前に単元計画を確認しておく、単元の目標や教材観を授業者はどのように捉えているかなどが挙げられる。また、児童観から児童との関りを考えることも大切だ。

6. 昨年度の授業実践

昨年度は、実地研究Ⅰで埼玉大学教育学部附属小学校第四学年「鑑賞」領域の題材開発を行わせていただいた。『うち美術館を鑑賞しよう』という題材名を設定し、児童が図画工作科で今までに製作した作品を部屋に飾った様子と飾っていない様子の二通りを写真に撮ってきてもらう。その写真を鑑賞の材料として進めることで、作品の見方の変化だったり、二通りの写真から受けた印象の比較などを行った。実践の結果として出た課題を以下に挙げる。

〈課題〉

- ・授業の目的や意図が児童に伝わっていないため、曖昧な形で授業が進んでしまった。
- ・撮ってきた写真が、本来意図していたものとは異なった。作品を飾っている様子ではなく、作品そのものに焦点が当

てられた写真が多かった。

- ・保護者の方に協力してもらったが、「絵を飾る」方法を知らない可能性があることが見られた。(絵を壁にテープで貼るなど)
- ・家の中を映したくない児童生徒がいる。
- ・作品が家に残っていない。

授業者である自身の指導力不足、内容構成の浅さが目立ってしまったが、それを除いた課題から、ほとんどの児童は学校外に出ると「美術」を日常的に感じる事が無いのだろうということが窺えた。これは、学校教育ではなく家庭教育も大きく関与しているため、アプローチは非常に困難な問題であると考えられる。授業実践の際に、とある二人の児童の実態が私の中に印象づいている。「図画工作科で製作した作品は全部、一年生からずっと保管してある」児童と、「製作した作品は全部捨てられてしまった」という児童がいたことだ。「捨てられてしまった」という言葉からは、自分ではなく家族の意思で捨てられたと窺えた。こういった実態は、ほかの児童にも当てはまる可能性が大いにある。これに対して善悪を唱えるわけではないが、残念である気持ちと、日常と美術に距離があるという事実は間違いないと言えるだろう。

今回の実践から、自身の知識・技術や授業の流れの見直しが必要であると感じた。今後に向けて、題材の改善を研究テーマに沿って検討していきたい。例えば、「絵を飾る」方法について考えてみる。今回の実践から、児童や保護者の方の「装飾」についての知識等が無いように感じられたため、「装飾」の事前指導・準備を行うことで、児童が感じ取る印象や考えの幅が広がるのではないだろうかと考える。具体的には、額装の概念や展示の方法、配置などだ。自分の作品をよりよく見せるためには、どのような工夫を凝らせばいいかを教師が支援をしながら、児童自身が考えられるようなものが望ましい。他にも、写真の撮り方に問題があったことから、画角の収め方についての指導は必須だと考える。そのためにも、今回の実践が「作品」を鑑賞することではなく、「作品が飾られている様子」を鑑賞することが目的である、という前提を児童が認識していることが重要である。そして、プライバシーに関わる家の中の写真については、その有無を再検討すべきである。例えば、作品を飾る場面の設定を家庭から学校内に変える。他には、私が卒業制作で創った部屋の3Dモデルを利用して仮想空間に作品を飾るという方法も考えられる。作品が家に残っていないという課題に対しては、学期末や年度末など節目となる時期に子の実践を行うことが良いだろうと考える以上の改善点を実践に組

み込み、今後「製作後」のアプローチとして児童に還元できるように考えていきたい。

7. 今年度の授業実践

今年度は、実地研究Ⅱで前年度に引き続き、埼玉大学教育学部附属小学校で研究に関わる実践を行わせていただいた。今年度は、第二学年を対象に授業実践を行った。題材名を『おって きてつ つるして かざって』と設定し、第一学年の時に実施された「おって きてつ すてきなかざり」を発展させた内容として実践した。今回は低学年を対象としたため、児童の実態に応じた実践且つ学校の中で実践できる「装飾」に注意して実践を行った。本題材では、紙を折り重ね切ったり、できたものの形や色の組み合わせを考えて繋げてみたりして、出来たものを教室や身近な場所に工夫して飾る。自分が作ったものを飾って、それを鑑賞することで、その楽しさや喜びを感じることができるよう目指した実践である。この題材を構成するにあたり、留意した点は、①児童から「飾りたい」という声を引き出す。②飾る方法を工夫する。の2点だ。①については、導入時に数名に児童から声が上がったことから、自分が作ったものを飾りたいという欲求が備わっていることが窺える。②について、今回は教室でどのように工夫できるかを検討した。通常であれば、教室の掲示板や黒板、窓といった平面に貼ったり、教室の入り口の扉に吊るしたりといった方法がとられる。今回は、造ることは勿論、造ってできたものを飾って楽しむことを目的の一つとしていたため、更なる工夫が必要であると考えた。今回は教室の天井を斜めに横断するように造ったものを吊るすという飾り方を採用し(画像1)。空間を感じられるような飾り方にすることで、多視点からの鑑賞や全身を使った鑑賞の可能性を期待した。実際に、実践を行った時の児童は、新鮮な反応が多く、驚き感動している様子が多く見られた。色々な角度から見てみたり、吊るした下をくぐってみたりと、児童なりに展示を楽しんでる様子であった。また、製作時には上手く造れている自信がないと口にしてきた児童についても、吊るしてみたら楽しんでる様子が見受けられた。

今回の実践から、「作品を飾る」という行為一つをとってもその手法は多岐に渡ることで、学年や題材によってそれぞれ適切なものを選ぶことで、児童が鑑賞をより楽しめることを考えさせられた。また、実践や実習を通して鑑賞の在り方についても見直していく必要性を感じている。図画工作科が過程を重視する教科へと変化している中で、児童が製作した作品を展示して、鑑賞をするという機会は展覧会を除き少なくなってきた。勿論、全ての題材で鑑賞を行う

必要性はない。題材によっては、製作の行為そのものが意味を持ち、その行為の最中に児童同士で無意識に鑑賞を行っている場合もある。ここで主張したいことは、毎回時間をとって、構成を考えてといった鑑賞を行う必要性はないが、全く行わないのは勿体無いのではないかということだ。自分が造った作品を飾って鑑賞する機会は児童にとっては貴重な経験であるように思える。小学校では、校内展というものがある。自治体によって開催の頻度は異なるが、おおよそ1年に1回学校行事として開催される場合が多いだろう。しかし、年に1回のきりの展示であるとする、卒業をするまでに6回しか経験をすることができない。十分多回数にも感じられるかもしれないが、この1年の間に児童が行う題材の数を考えると、こういった機会が年に1度しかないのは些か勿体無いように考える。そのため、授業として今年度実践したような鑑賞を取り入れることを推奨したい。その際に留意することとしては、単元の構成としてしっかり鑑賞を入れた上で実践に取り組むことと児童の発達に合わせた鑑賞方法を採用することだ。題材によっては、鑑賞の場を設けることが適していないものもあるため、内容の精査をした上で実践することが望ましい。学校内の展示について、V. ローウェンフェルドは様々な点に言及している。ここでいくつか私が大切だと考える内容を取り上げたい。

- ・学級内の展示はいつでも子供たちのために行われるものである。
- ・型にはまった作品や模写した作品は総て、展示すべきではない。子供自身を表現し、まじめに努力したものを掲げるべきである。
- ・流れ作業的に、大規模なものを、無意味に分割して行うべきではない。小規模に、度々、しかも意味のあるものを行うべきである。

以上の様に、ローウェンフェルドは学級内の展示について積極性を説いている。また、造ったものを何でも展示するのではなく、適切なものを選ぶように述べているところから、完成品を見るだけでなく、児童がどういった心持ちで作品に向き合っているか、製作に取り組んでいるかなどの視点も大切であると言える。

また、鑑賞を取り入れない場合については、単元の振り返りを行うことが大切だ。一般に、作品の完成→作品カードの作成の手立てが取られるが、作品カードを書くとなったときに、頑張ったこと、見どころなど形式化してきているため、より効果的な振り返りとなるように、「何を書くのか」を改めて考える必要がある。「4. ポートフォリオの可能性」で述べた e ポートフォリオを利用する際も、以上の様に何

を振り返るのかという点に留意しなくてはならない。



(画像1)

8. 今年度のその他の実践

今年度は、研究に関わる実践に2点参画させていただいた。1つは、埼玉大学の学内図書館に絵画作品を飾る計画だ。この取り組みは以前から行われており、数年に一度絵画を掛け替える機会に立ち会うことが出来たため、その様子や研究と絡めた考察を行う。2つは、埼玉大学教育学部の講義「図画工作科指導法」にてティーチングアシスタント(以下TA)を勤めた際に、受講生の作品を展示する企画を引き受けさせていただいた。この実践について、教員養成課程に所属している受講生と実際の展示の様子を参考に考察を行う。

1) 学内図書館での絵画作品の展示

埼玉大学図書館では、随所に絵画作品が飾られている。この絵画作品は、埼玉大学教育学部の美術分野を卒業した方や美術分野の教授方、寄贈して下さった方の物を中心に飾られており、数年に一度作品を掛け替えている。今回、その掛け替えに立ち合わせていただいた。1から3階のうち、2、3階の作品を掛け替えた。図書館の壁の色は基本白色で、窓と窓の間に飾るスペースがあるといった状態であった(飾るためのフックが固定されている)。ここで、飾られる場所が固定されているから、その場所に次々と掛けていけば良いというわけではなく、絵画作品にも様々な形態があるため、作品と図書館の雰囲気 considering して配置しなければならない。美術作品を適切な形で日常に取り入れることで図書館という空間がどの様に変化し、利用している人々や作品を制作した人々にどのような影響を与えているのだろうか(画像2)。図画工作科においても身近な美術について、展示や飾ることを礎に考えていきたいと感じる。昨年度の実践で自分の作品を家に飾るという試みを行ったが、児童の中で自分事として落とし込めていない結果が見られた。学内でのこの取り組みについては、空間を彩るという視点

が主であるが、初等教育においては加えて、飾るものが自分の作品だという視点が大切であると考え。自分に関わりの深い作品を日常に取り込むこと、また自分と関わりが深いと実感が出来る指導を意識したい。



(画像2)

2) 図画工作科指導法における作品展示

図画工作科指導法とは、埼玉大学教育学部で開講されている講義の一つである。学校教育教員養成課程小学校コースの必修講義で、前期と後期で受講している学生が分野ごとに分けられている。今回の実践は後期に行われたもので、受講生は主に心理・教育実践学専修、音楽分野に所属している。以下、受講生に課された課題は以下の通りだ。

課題：「つくりたいものをつくる」（材料・技法等自由）
目的：自分で秩序（order）を作る経験をする。
方法：①テーマを決める。②アイデアスケッチを行う。③多数のアイデアを挙げる。④制作する作品を選ぶ。⑤その内容を明確にする。⑥制作のための工程（手順）を記す。⑦材料・用具を各自で準備する。⑧決定した作品の制作を始める（但し、途中、変更が生じたら、その内容を含めたアイデアに変更して制作することは可能）。⑨授業の最終週に、展示フロアで展示作業を行う。⑩1週間の展覧会を行う。

簡潔に述べると、後期一杯の時間を使って作品を完成させ、展示会を行うという課題である。今回はこの展示会の企画を先生から拝命し展示作業の指導役を担った。課題の詳細にある通り、目的は秩序を作る経験をすることであり、これは制作過程に目を向けた目的だと解釈することが出来る。そして、その制作の過程の中には展示作業も含まれている。

展示会を通して、企画を考えたり展示の様子を観察したりと様々な活動を行い、教員として規模に関わらず展示会

を催す際の良い学びとなった。学んだこととして、第一に、展示する場所をよく知っておく必要があるという点を挙げる。展示場所の空間をどう使って作品を展示するか、人の出入り、壁や天井を使う際の注意などが挙げられる。例えば、展示する場所の広さや壁に画紙等で穴を開けずに作品を飾るにはなど、空間を利用する際の工夫を考えなくてはならないことを学んだ。第二に、展示のバランスを大切にしなければならない必要がある。今回に関しては受講生の制作した作品が平面・立体と統一されていなかったことから、「全体のバランス」を重視する必要がある。小学校では、題材に沿って製作をするため「全体のバランス」については考えやすい。しかし、作品を羅列する展示が必ずしも良いとは限らず、製作しているモノの題材が同じだからこそ、羅列をすると動きが無い展示になる可能性がある。一つの案としては、展示にテーマを設けて展示自体に世界観を持たせる。展示された作品は、その世界観の中に位置づけられるため、児童に肯定的な認識を持たせられる。注意点は、テーマを児童に伝えた上で製作を促すと、児童の表現や思考の幅が狭まってしまう可能性があることだ。この案を取る場合は、展示・鑑賞をする題材を適宜選ぶ様に、テーマの有無も適宜選択する必要がある。第三に、制作に意欲が見られない場合でも、展示を通して作品の良さを認められる可能性が出てくる場合があることを学んだ。本講義では、制作過程を可視化するために、毎週の講義ごとで制作の進捗を写真に撮り（アイデアスケッチを含む）、指定されたWEB上にアップロードすることが促されていた。しかし、その提出率は芳しくなかったことから、受講生の「つくりたいもの」や「制作に対する意欲」が見えづらい状況にあった。そんな状況下での展示作業のスタートであったが、多くの受講生が展示作業を楽しんでいる様子が見られたことから、展示会による肯定的な効果があるのではないかと推察した（画像3）。展示作業は、大まかな決まりや配置（平面作品は壁面、立体作品は展示台または床など）を指導役である私が決め、実際に受講生各々がどこに配置するかは、受講生自身にその場で決めてもらうこととしていた。また、作品を配置をする際に「周りとのバランスを見て」展示する様に伝えたと、似た雰囲気の商品同士を近くに配置していたり、作品と作品の間隔を適切な距離で展示したりと、工夫している様子が見られ、その工夫の際には、受講生同士協力している様子が観察でき、コミュニケーションの場としての役割を持っているようにも捉えられた。本展示会については、展示会の企画にたいする反省点や小学校教員として図画工作科の授業をいずれ執ることになる受講生に対する展示の最低限の知識をどう教授するかなど、様々な視点での改善点が見えたものの、展示作業を通して、展示会は制作（製作）した作品をより良く魅せることができた機会だと振り返る。本研究の「製作後」の作品に関わる研究の視点から見て、制作（製作）過程では、作品に対して前向きではない場合も展示の工夫によっては、制作（製作）者に前向きなアプローチになると期待

できるだろう。



(画像3)

9. 「こだわり」と「愛着」

本年度は、「製作後」の作品に関わる研究として実践を中心に考察を行った。図画工作科の教科観・指導観にて現在の図画工作科が製作行為の過程を重視していることを述べたが、本研究ではあくまで製作後に焦点を当てて研究を進めてきた。昨年度と今年度での実践や得た知見を経て、製作後と製作行為の過程の繋がりについて考えが至る様になった。製作後と製作行為の過程どちらかに偏って物事を捉えるのではなく、両者の繋がりに目を向けて今後も研究を進めていきたい。例えば、製作後に「飾りたい」と思えるような過程を辿るために、授業の構成やアプローチを考える必要があると思う。

現時点では、この製作後と過程のつながりを考える上の鍵として、「こだわり」や「愛着」が大切ではないかと考えている。斉藤ら(2016)は、こだわりを「こんな作品にしたいから、自分はこの形や色、技で表したいという考え」と定義している。全体論では、「もっと～したい」という思いを持つことをこだわりと定義しているが、斉藤らは「もっと～したい」という思いを持つことは、学び合いを経て、到達するイメージであると述べ、ここでは「子ども一人一人が早い段階から、この形で、色で、技で、こんな表し方をしたいというこだわりを持って活動している」と捉えている。つまり、「もっと～したい」に対して、それぞれ形や色、技の試行錯誤や表現の追求を行うことが、児童がこだわっているということなのだろう。また、新居らは、こだわりについて「[学びを創り続けている姿の中には、どの学年でも子どもが自分の活動に手応えを感じて、いどみ続けようとする姿がある。この「子どもが、自分の思いやねがいを表現しようといどみ続ける姿」を図画工作科では、『こだわり』をもって活動に取り組む姿とよぶことにした。この『こだわり』をもって活動に取り組む姿こそ子どもが意欲的に活動に取り組み、没頭している姿である」と述べている。このこだわりを児童が持っている様子を見抜くこと、持たせるために児童の作品をよく観察したり、どんな思いを持って製作しているのかを丁寧に見取る必要があるだろう。

また愛着について、一般的には心理学の視点から対人関係の中で捉えられることが多い。三重大学は、「愛着

(attachment)とは、個人が特定の個人にたいしてもつ情緒的な絆」と定義している。では、モノに対する愛着は、どのように定義され、捉えられているのだろうか。寺内ら(2005)は、「モノに対する愛着は、自己の形成において精神的な欲求を満たすための感情的な行動であり、モノを媒体として様々な手段によって欲求が満たされ、自己の実現が確認できた瞬間に愛着を感じることができる。」と述べている。また、「モノの存在がヒトの満足感を高め、他のモノと区別してある特定のモノとの間に高い次元でのパートナーシップが形成され、自己の存在を認識する瞬間、つまりモノに自分を見いだしたと感ずる瞬間が「モノに対する愛着」であるといえる。」とも述べている。先の知見から、児童が作品を製作するにあたり、その作品に自己を同一できるかが愛着の有無を左右すると考えた。製作した作品に愛着を持つということは、その作品に思い入れや児童の表したい世界観が込められているということで、教員はそれを引き出すための指導を製作の過程で行う必要がある。

以前、児童が製作した作品を完成した直後にゴミ箱に捨てている場面を目にしたことがあり、児童曰く「こんな作品と言っていた。何故このような行動をとったのか考えると、作品に対する愛着が殆どないこと、作品が自分の思い描いていた形にならなかったことや「もっと～したい」という思いはあったがそれを形にする方法が分からなかったなど、モノに対して自己の欲求が上手く出せなかったのではないだろうか。製作した作品を捨てるということは、「製作後」に何も残らないということである。製作の過程を記録していれば作品の軌跡は残るかもしれないが、捨てるという行為を最終的に行ったのであれば、その製作過程は当人にとって必ずしも糧となるものであるとは限らない。以上の「こだわり」と「愛着」についての先行研究から、改めて「製作後」と「製作の過程」の結びつきは、本研究を進めるにあたって重要視していかなければならない視点であると認識させられた。

10. 終わりに、来年度以降に向けて

図画工作科は作品主義から、製作過程の重視へと教科観が転換され、作品を完成させるという目的は二次的なものになった。特に「造形遊び」の目的は、始めから具体的な作品を目的にしていなかった。一方で、「絵や立体、工作に表す」は、およそそのテーマや目的を基に作品をつくらうとすることが目的にある。しかし、後者の「絵や立体、工作に表す」までも、製作過程のみに指導が重視されているのではないかと、先行研究や実践から感じた。そこから、昨年度は製作後と製作過程を切り離し、「製作後」に焦点を当てて本研究を進めていたが、今年度の活動から、どちらが図画工作科にとって大切な視点となるのかではなく、両者の繋がりがこそが、重要な視点になるのではないかと考えさせられた。製作過程を重視する理由として、過程が子どもの心身の成長・自己同一化に大きく関係しているからだとして述べた。しかし、「こだわり」や「愛着」という視点を加

えてみると、製作過程から製作後までの一連の行為こそが児童の創造的、造形的な見方・考え方の成長に繋がるのではないかと思う。製作の過程を重視すると一概に言えず、製作の過程の中でどのような部分を重視するのか、それが曖昧になっているのではないかと考える。製作の過程で、児童がどういう思いを作品に込め、工夫を凝らそうとしているのかを丁寧に聴き取り、それに対して教員が助力することが「愛着」ないし、製作後に「飾りたい」「大切にしたい」と思うことに繋がるだろう。そして、その思いにこたえる展示を行うことで、図画工作科が児童の人間形成を豊かなものに変化させられるのではないかと期待する。

来年度以降は、昨年度、今年度の実践と先行研究から得た知見をもとに、実際に教員として指導をしていく中で研究を行う。そして、昨年度同様自身の知識・教養不足を実感した場面が数多くあったため、美術全般に関する知識の獲得、自身の制作活動の継続を引き続き行う必要がある。また、学校現場へ出ても、「理論と実践の往還」を意識して、「理論は理論」「実践は実践」とそれぞれで完結することがないような活動が必要である。「理論」で言えば、ハーバート・リードやヴィクター・ローウェンフェルドといった人物やパウハウスといった教育機関などが参考として挙げられる。それらがなす「理論」は、先行研究を見ている中でも美術教育の基になっている場合が多いように感じられた。また、新たに「こだわり」と「愛着」の視点から、心理学からの視点で見た美術教育についても参考していきたい。そして、実践としては、来年度以降は教員としての指導が主となるだろう。実際に学校現場での学びの中で、本研究を引き続き進めていきたい。それとは別に、自身の制作活動が重要であると考えている。自分の手で実際に経験をすること、児童と同じ目線に立って考え手を動して製作をする。さらに、制作後に自分なりに展示をしてみる。この一連のプロセスが、実践と研究への新たな糸口になるだろうと期待している。実際の困難を身に感じることで、様々な視点からのアプローチができるかもしれない。

最後に、昨年度に引き続き、今年度も実践に協力してくださった実地研究先の埼玉大学教育学部附属小学校の教職員と児童の皆様に深い感謝を申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり、埼玉大学教育学部芸術講座美術分野所属の小澤基弘教授、内田裕子教授に新たな知見の獲得や経験や研鑽の機会を与えてくださったこと、ここに深謝の意を表します。

主な参考文献

- 1) 文部科学省. 2018. 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編』. 日本文教出版
- 2) 塩川水月・芳賀正之. 美術教育における e ポートフォ

- リオの活用. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要. 2021-03-25, 第31巻, p. 169-178.
- 3) 吉川昌宏. 図画工作科におけるポートフォリオの実践状況に関する研究. 美術教育学:美術科教育学会誌. 2006, 第27巻, p. 415-427.
- 4) 鳥原正敏. 図画工作の教科観に関する一考察-冊子「図画工作とは-教科を考える-」を通して-. 都留文科大学研究紀要. 2017-03, 第85集, p. 73-91.
- 5) 井ノ口和子. 「図画工作科の教科観」の転換に向けて-初等教科教育法(図画工作)の取り組みを通して-. 共栄大学研究論集. 2018, 第16号, p. 143-153.
- 6) V, ローウェンフェルド. 竹内清・堀内敏・武井勝雄(訳)(2002). 美術による人間形成 創造的発達と精神的成長. 黎明書房
- 7) ハーバート, リード. 宮脇理・岩崎清・直江俊雄(訳)(2010). 芸術による教育 Education Through Art by Herbert Read. フィルムアート社
- 8) 木野和代・岩城達也・石原茂和・出木原裕順. モノへの愛着の分析 対人関係とのアナロジーによる測定. 感性工学研究論文集. 2006, 6巻2号, p. 33-38.
- 9) 寺内文雄・久保光徳・青木弘行・橋本英治. 愛着の発生に関わる因果モデルの構築-人工物設計における質的転換を目指して-. デザイン学研究. 2005, 51巻6号, p. 45-52.
- 10) 斎藤江利子・中川佑紀, 図画工作科, 研究紀要/金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校, 2016, 70巻, p78-87.
- 11) 新居奈津子・大和明日香. 学びを創り続ける図画工作科の授業~主体的に発想・構想の能力を働かせるカリキュラムづくりについて~. 大阪教育大学附属平野小学校.
- 12) 谷本久美. 青年期の愛着関係に関する研究-愛着と対人的構え・充実感との関連について-. 2006.